

6—新 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** まで、16 ページにわたって印刷してあります。
また、解答用紙は両面に印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に H B 又は B の鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、
解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の A・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものを
それぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、
「や」などもそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 受検番号を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 鍋の中の残りで雑炊を作る。
- (2) 累卵の危うさを感じる。
- (3) 前任者の更迭を受けて要職に就く。
- (4) 友人を玩弄するのはいけないことだ。
- (5) 私の不安とはウラハラに、彼は約束を守った。
- (6) 母校が優勝したというロウホウがもたらされる。
- (7) 先達を尊敬し、教えを受けることをシジする、という。
- (8) 条約の締結で世界情勢はイチヨウライフクとなるだろう。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

終戦後十数年経った頃、小学校の教員として働く佛子は、夫の権蔵と息子の清太と暮らしている。将来有望なビッチャーとして活躍していた清太だったが、公立中学校東京大会決勝戦で足を怪我してしまふ。

富枝が立ち上がり、
「みなさん、茶そばがあるんだけど召し上がらない？」
訊くと啓太は遠慮したが、加恵は、

「まあ茶そば。大好きです。うれしいわ。」

と、素直に喜んだ。他にもトマトや卵焼き、キュウリの酢の物が並んだ食卓をみなで囲む。

啓太と清太が野球の話をしている。それを見て佛子の胸は、光の粒でいっぱいになる。

戦中のつらい日々を越えて、ようやく落ち着いて空を眺めたり、四季を感じたり、ご飯の支度や洗濯や掃除をしたり、仕事に集中したりできるようになったんだな、と改めて思う。清太に巡り会って、一所懸命育ててきた。学校で生徒たちと接する中でさまざまなことに気付かされるように、清太からもたくさんさんのことを教えられて、ここまでどうにかやってこられたんだな、と。

佛子は、箱投げ選手としては名を残せなかった。けれど、自分が歩んできた道は、きつと誰にも真似できない尊いものなのだという妙な自信が、このときはじめて湧いてきたのだった。

かたわらで加恵の話に茶々を入れては、体をくねらせて笑っている権蔵を見詰める。自然と笑みがこぼれた。

「先生、幸せそうですね。」

啓太が不意に言った。こちらの様子を窺_{うかが}っていたらしい。恥ずかしくなって、「そう?」ととぼけると、

「よかった。会いに来てよかった。」

彼は安堵したようにつぶやいた。

夕方までいろんな話をして、啓太と加恵が帰ったあと、清太が言った。

「僕、明日から練習再開しようかな。」

足の痛みも違和感もすっかり消えたから、たぶん大丈夫だと言う。

「まだ早いんじゃない? 故障したときは長めに休んじやったほうが、予後がいいのよ。」

「そうね、無理して悪化してもね。」

と、富枝も梯子に同意した。

「うーん。でもなんていうか、体がなまっちゃって。そっちのほうが気持ち悪いんだ。」

毎日欠かさず練習してきただけに、十日も休んだら、それはそれで、体の感覚が鈍_{だる}って落ち着かないのだろう。

「でも、いきなり練習だと……。」

(2) 言い掛けて梯子は、横に倒した頭をハツと起こした。ちゃぶ台に肘を突いて、書き物をしている権蔵に目を向ける。視線に気付いた権蔵の顔が一瞬こわばり、やがて意を決したような引き締まった表情へと変じた。

「清太、そしたら父さんとキャッチボールしようか。」

「えっ。」

清太は声をはね上げる。「だって。」と漏らして、口をつぐんだ。七、八年前に一度だけキャッチボールをし、筋肉痛で寝込んだ権蔵に誘われれば戸惑うのも当然だろう。

「明日の朝、俺と投げ合ってみて、調子が戻ってたら練習に行けばいいよ。」

不安そうな顔をしている清太を、

「そうよ。父さんに相手してもらいな。」

と、梯子は軽やかに促した。速投までマスターするのは叶わなかったが、肩慣らしのキャッチボール程度なら、権蔵は普通にできる。清太が家に戻ったのちも、早朝に近くの空き地まで行つて練習を続けたのである。

「うん……でも父さん無理しないでね。」

清太の気遣いに権蔵は応えない。いきなり投げられるようになった姿を見せて、驚かせてやろうと目論_{もくろ}んでいることは、鼻の穴を押し広げたその顔が物語っている。

翌朝四時、「キャッチボール前の調整に付き合ってくれ。」と権蔵に叩き起こされ、梯子は寝ほけながらも、グラブを手に空き地に向かった。権蔵は、いたずらに腕を回す奇妙な準備体操をしてから、

「いくぜ。」

と、声を掛け、一球放った。山なりの球だが、ちゃんと梯子の胸元に届く。

「清太のおかげで、権蔵さんのできることがひとつ増えましたね。」

清太の父親にならなければ、権蔵は一生、キャッチボールなんぞしなかっただろう。

「清太とお佛のおかげでな。」

権蔵は言つて、梯子の返した球を両手で受け取めた。はじめのうちは右手をグラブに添えて捕球してください、という梯子の教えを律儀に守っているのだ。

「今度、鶏田さんと作るラジオドラマ、プロ野球の逸話も入れようかな、って思つてさ。」

権蔵がこんなふうに自信たつぷりな姿は珍しいな、と梯子は目をたわめて夫を見詰める。

空き地に着くと、権蔵はまたやみくもに腕を回し、清太は肩甲骨と手首をゆつくりとはぐすような準備体操をした。両者、整った頃合いを見計らつて、梯子は六助のボールを清太に渡す。

「懐かしいな、このボール。」

清太は微笑んで、権蔵に向いた。

「行くよ、父さん。」

「おう、思いっ切り投げていいぞー。」

まずは近距離から、清太はゆるい球を投げた。権蔵が受けて投げ返す。それだけのことなのに、「おお。」と清太は驚きの声をあげた。

清太が少しづつ後ろに下がって投球距離を伸ばしていても、権蔵は清太の胸元にきちんと返球することができた。

「すごいや、父さん。どうしちゃったの?」

清太がうれしそうに、ぴょんと跳ねる。権蔵は片眉を上げて、

「どうしたもなにも、元からこのくらい投げられたぜ。」

と、虚勢を張る。清太は「えー、そうだっけ。」と笑つて、ちらとこちらを見た。梯子も笑つて、肩をすくめてみせる。

「これはさ、父さんが清太から受け継いだものだ。まあ技術はお佛から教わったけどさ、キャッチボールをしたいって気持ちは、清太からもあったんだよ。」

権蔵が大きな声で言つた。清太はボールを受け取つて、しばらくグラブの中をジツと見詰めていた。

「僕、足下が定まらない感じでしたんだけど。」

故障のことを指しているのではないだろう。

「そんなこと、なかったんだな。」

清太は勢いよくボールを投げた。パシッと権蔵のグラブが派手な音を

立てる。

「痛えつ。よくこんな球投げられるな。」

「きつと父さんももつと練習すれば、このくらい速い球が投げられるようになるよ。僕から受け継いでるんならさ。」

清太は冗談めかして言つて、ケラケラと甲高い笑い声を立てた。そう言われて権蔵は、ムキになったのだらう。やたら大きく振りかぶつて投げ返す。フォームが整っていないから、力がボールにうまく伝わらず、叩き付けるようなワンバウンドになった。

——明日はきつと、ひどい筋肉痛になるだろうな。

梯子は夫の必死の形相を見詰めながら、笑みを漏らす。でも、少々おかしいフォームでも、きれいな軌道を描かなくても、球はちゃんと清太のもとに届いているのだ。そうして清太は、しっかりと球を受け止めている。それで十分だという気が、梯子にはしていた。

——これが、うちの家族なんだから。

「清太、足の調子はどうか。」

権蔵が呼びかける。

「痛くないよ。変な感じも、もうない。」

清太が元気に答える。

「もう大丈夫そうね。球筋もぶれてないし、フォームも怪我の前と変わらないから。」

梯子は太鼓判を捺した。

「そしたら、今日の昼からの練習、行ってもいい？」

「うん。でも軽い調整くらいにしとくのよ。」

「わかつてる。」

「よかつたな、また野球ができて。」

権蔵が言ふと、清太は勢いよくうなずき、

「あの日負けて、よけいに野球が好きになった気がする。」

〔問1〕波線部^(A)やみくもに^(B)、太鼓判を捺した。の本文中での使われ方として最も適切なものはどれか。

① やみくもに^(A)

ア ぎこちなく

ウ 余裕のある様子で

② 太鼓判を捺した。^(B)

ア 問題がないと保証した。

ウ 不安な気持ちを隠した。

イ 元通りだと勇気づけた。

エ 無理するなど念を押した。

〔問2〕自然と笑みがこぼれた。とあるが、このときの梯子の気持ちに

最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 幸福そうな権蔵を見て、家族を明るく引く張っている自分自身のことを誇らしく思い幸せに感じる気持ち。

イ 檜投げの選手として挫折した自分と野球に打ち込む清太を比べ、後悔を感じつつも応援しようという気持ち。

ウ 家族や来客の様子を見て現在の生活を幸せだと感じ、そこに至る過去の生活にも価値を見いだしている気持ち。

エ 家族と生活する中で自分も成長したことを実感し、はじめて過去の自分に別れを告げることができた気持ち。

晴れ晴れとした顔で言つた。

「じゃあ、そろそろ戻つて支度する？」

梯子の声に、清太はかぶりを振つた。

③「もうちょつと、父さんとキャッチボールしたい。少し速い球投げるよ。」

権蔵は一瞬ギョツとして体を引いたが、

「お……おう、ドンと来いだ。」

と、胸を張つた。

清太は笑つて、ほんの少し球威を増した球を投げた。権蔵はへつぱり腰ながらも両手で受け取る。パシンという心地いい音が濃い緑の中に響き渡る。

梯子は、もう怖いものが飛んでくることのない、青く抜ける夏空を見上げた。はるか彼方に、入道雲がむくむくと湧きはじめている。

(木内昇「かたばみ」による)

〔注〕富枝——権蔵の母。

啓太——梯子の教え子。

加恵——梯子の元同僚。

クラブ——野球の捕球用手袋。

鶏田さん——権蔵の同僚。

六助さん——権蔵の知り合い。

朝子さん——権蔵の妹。

〔問3〕言い掛けて梯子は、横に倒した頭をハツと起こした。とあるが、このような行動を取つたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 権蔵は清太とのキャッチボールに消極的だったので、権蔵に自信をもたせるために清太と一緒に練習してもらおうと考えついたので。

イ 運動が苦手な権蔵に書き物ばかりするのはなく、スポーツに対する苦手を意識をなくさせるよいきっかけになるとひらめいたから。

ウ 野球を得意とはいえない権蔵が清太のために無理をして練習し、以前のように寝込んでしまうのではないかと心配したから。

エ 清太に内緒で投球練習をしていた権蔵のことを思い出し、練習の成果を発揮するよい機会だと思いついたから。

〔問4〕こそばゆそうにしながらも、そう返した。とあるが、このときの権蔵の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 梯子や清太との新しく始まった暮らしに満足を感じているけれど、これからもっと仲のよい家族になつていきたいと思つている。

イ 久しぶりに息子と向き合いキャッチボールをすることに照れくささを感じながらも、二人の関係を深めるきっかけになると思っている。

ウ 家族以外の他人にキャッチボールを見られたことのきまりの悪さを感じながらも、じつくりと清太との関係づくりをしたいと考えている。

エ 成長した息子と向き合うことは気が進まないけれど、父親としての責任感を失わずに家族を守つていきたいと考えている。

〔問5〕⁽⁴⁾ 梯子も笑って、肩をすくめてみせる。とあるが、ここでの梯子の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 梯子も権蔵の強がった大げさな発言におかしさを感じ、その思いを清太と共有したいと思っている。

イ まだキャッチボールが上手いとはいえない権蔵が自慢する様子を見て、あざけている気持ちを清太に示そうと思っている。

ウ 権蔵と清太のほほえましいやりとりを自分のことのようにうれしく思う反面、うらやましく思っている。

エ 野球に対して自信のある様子だった権蔵が本当に遠投することができた、と清太と一緒に驚いている。

〔問6〕⁽⁵⁾ 「もうちょっと、父さんとキャッチボールしたい。少し速い球投げるよ。」とあるが、このときの清太の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 運動の苦手な権蔵に対してはあまり期待していなかったが、想像以上に上手になった父の姿を見て、これまで投げたことのない速さの球で相手をしやうと思うようになった。

イ キャッチボールすらまともにできなかった権蔵を軽んじていたが、一所懸命早朝練習の成果を出している姿を見て感動し、自分ももっと野球が上手になりたいと思うようになった。

ウ 最初は不安に思っていた権蔵とのキャッチボールだったが、球のやりとりをするうちに権蔵を頼もしく感じ、父との時間をもっと大切にしたいと思うようになった。

エ 権蔵が翌日に筋肉痛になることを心配している母に反発を感じ、このままキャッチボールを続けて、父と共に自分も上手くなっていきたいと思うようになった。

3 次 の 文 章 を 読 ん で、 あ と の 各 問 に 答 え よ。(* 印 の 付 い て い る 言 葉 に は、 本 文 の あ と に (注) が あ る。)

「歴史」というのは、個々人の思い出、記憶と違って、公的な出来事である。おなじ出来事でも公的な意味を帯びたものである。共同的・社会的関心に照らして意義のあるもの、その意味形象だけが歴史学の対象としてふさわしい。そこには、私的領域を越えたインパーソナルな次元がいつも包み込まれている。そうした次元・領域とは、たとえばよろもろの社会集団であり、村や都市であり、地域であり、国家であり、ヨーロッパのような文化圏であり、最終的には、世界の人類、ということになる。(第一段)

こうして空間的にも時間的にも、物語の構成は、一人の歴史家が行うにしても、実際は問主観的行為なのである。野家啓一^(*)によると、この「想起の共同体」に支えられて個人的記憶の欠落や記憶違いは補填・修正され、またこうした共同作業を通じて構成された歴史的事実は、個人的思い出のレベルを超えて「問主観の妥当性」を獲得する。つまり過去というのは、複数の人間の多様な想起的射映の「志向的統一」だ、ということになる。それぞれの人間が想い起こすのは過去の一面的な相にとどまるが、同一過去には多様な相・現れがあると皆が意識してそれらが調和的に統一されると、歴史的事実が確定するのだろう。おなじく野家によると、小林秀雄の「思い出」論は、そのままで「歴史」に転成せず、甘美な個人的感情であっても問主観的な歴史ではない。歴史に転成するためには何より「物語り行為」による媒介が不可欠であり、それによつてはじめて断片的思い出は構造化され、また共同化される。その過程で母親の感懐の微妙な私秘の彩りは言葉の砥石でそぎ落とされるが、逆に普遍性と抽象性を獲得し、独立した作品となつて「記憶の共同体」へと登録される。それが歴史的事実の成立条件だといふので

〔問7〕 本文の内容や表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 家族以外にも人物を多く登場させ、様々な登場人物の心の動きを詳しく描くことで、物語を多面的に表現している。

イ 「茶々を入れて」「ぴょんと跳ねる」「ケラケラと甲高い笑い声を立てた」の表現から、清太の子どもらしい無邪気な様子が読み取れる。ウ 梯子の視点が中心になってはいいるが、会話を多用することでたくさん登場人物の心情が読み取りやすくなっている。

エ 「バシンと」「ギョッとして」「ドンと来いだ」などのカタカナ表記を用いることで、戦後の解放感がいきいきと描かれている。

ある。(第二段)

⁽²⁾ では歴史家は、どんなふうにか公的な歴史を描けばよいのだろうか。そのときに問題になるのが、いわゆる「歴史観」である。「歴史観」とは、歴史の変化ないし展開は何のために、何に向かつて、いかなる軌道を描いて進行していくのか、そしてまた、その変化ないし展開は、どんな要因によつてもたらされるのか、という点をめぐる基本的考え方・解釈原理である。この歴史観にもとづいて、歴史家は無数の事実を取捨選択することになる。史料に相対するその当初の姿勢もこの歴史観が決めている。(第三段)

しかし、歴史の見方を歴史観と呼びうるのは、ある一人の歴史家のあまりに独創的で奇矯な歴史の見方ではなく、それがそのテーマに関連する領域についての、多くの歴史家、そして教養人に共通する見方になっている場合のみである。すなわち、私の歴史が皆の歴史になるため、多くの同時代人に共有されうる装置が「歴史観」にはかならない。それは必ずしも固定したものではなく、時間の経過とともに過去との個人的・集団的対話を介して変容していくだろう。(第四段)

歴史観は、しばしば歴史的事象の個々を分別し意味づける規則として凝固・定式化されて「歴史法則」となるが、あらかじめ決まっている法則など、それこそ非歴史的だし、実際の歴史にあるわけがないと、そのイデオロギー性を批判するのが現在の大方の歴史学者の態度である。今や、マルクス主義の唯物史観など教条的な歴史法則はもとより、経済状態や交換形式、生産者と消費者の距離などに着目したドイツ歴史学派の発展段階説も信用を失っている。(第五段)

また、近年まで世界の歴史学を率いてきたアナール派では、発展段階説や進歩史観に則った法則はまったく容認されない。それどころか、歴史人類学や系(セリ)の歴史学は、それぞれ違った方向からそれを

断ち切っている。前者は、社会人類学や象徴人類学の手法を歴史社会に適用して時間の直線的流れを否定するところから出発しており、後者は、そもそも限定された範囲での数量の増減を跡づけるのみで、全体の方向については何も語らないからである。また女性史や民衆史もそうである。というのも、国民国家や資本主義への発展を担いそれに貢献した指導的政治家や思想家やエリート層、そしてその発展の段階を画する政治的事件や制度をテーマとする発展史において、無視されたり阻害要因と位置づけられたりした人々、彼ら／彼女らの文化や日常の生活・習慣、それらを主題にするのが、そもそも女性史や民衆史の目標だったからだ。進歩史観やそれにもとづく「歴史法則」「発展段階説」などは、女性史とも民衆史とも、まったく相容れないのである。(第六段)

しかしながら、社会史といえども、その研究対象が前代から何を受け継ぎ、あるいは改変し、後代へと伝えたのか、その結び付きの関係を確定し引き出さなければ、歴史として理解可能にならない。民衆の生活や文化が、不変の静態的な基層として実体化されてはならない。歴史は予見できる未来や目標に向かっているとははやいえなくなったとしても、それでもその変化の仕組みや方向性や意味を見つけるのが歴史家の仕事なのであれば、歴史の変化・発展についての視野を持ち、その上で出来事を読み解き評価していくしかない。(第七段)

客観性、公平性が重んじられますます精緻な実証の専門研究が主流となっている現代歴史学において、歴史法則はもとより歴史観という言葉にも、歴史の対象に向き合うのに予断を持たせるような語弊があるのなら、歴史の「道筋」と言い換えてもよいだろう。(第八段)

そもそも方向性の感覚を持たない歴史(家)は歴史(家)ともいえないのであろう。どこから来てどこに向かっているのか、そうした「パースペクティブ」がなければ、どんな歴史も意味がない。前工業化から工業化へ、農村主体の世界から都市化された世界へ、絶対王政から民主政

出来事の意味と価値を吟味する、ということである。⁽⁵⁾一見同様な現象や事態、たとえば中国で発明された印刷術とドイツで発明された印刷術、別々の民族における狩猟採集から農耕経済への移行、これらはそれだけを取り上げるのではなく、それらと関連するものもろの事象とともにパースペクティブの中で勘案せねば正しい歴史的な位置づけ・意味づけはできない。歴史の道筋についてのしっかりした見通しによってのみ、それがいかなる「発展」なのか、その意味・価値が明らかにされるのだから。(第十二段)

(池上俊一「歴史学の作法」による)

〔注〕問主観的——複数の個別的主観の間の関連を問題にするさま。

野家啓一——日本の哲学者。

小林秀雄——日本の文芸評論家、作家。

イデオロギー——思想や信念をまとめたもの。

マルクス主義——ドイツのカール・マルクスが提唱した社会主義思想。

唯物史観——カール・マルクスが提唱した歴史観。

教条的——ある教義を絶対的なものとする姿勢。

アナール派——フランスで主流となっていた歴史学派。

へ、口頭伝承から書記伝達へ、これらをかならずしも「進歩」と見る必要はないかもしれないが、各地域・時代におけるそうした「道筋」の様態および意味するところを、共通性と差異を勘案しながら解明する必要があるからである。(第九段)

⁽⁴⁾こうした歴史の「パースペクティブ的特質」を深く哲学的に考察してきたのが、現代ドイツの哲学者J・リュゼンである。彼は次のように述べる。すなわち、歴史はいつの時点を取っても偶然性に満ちていて、もしかしてまったく別様にも展開しえたのに、偶然のいたずらで、ある一つの方向に進む、ということを繰り返してきただけなのかもしれない。しかしそうしたものを、歴史家は固有の歴史叙述によって、時間的パースペクティブの中で方向性と関連性を認識できるように、また特定の出来事や要素を互いに結びつけられるよう叙述し、過去が現在と未来へと意味深く結ばれるよう、その叙述によって組織化しなければならない。そうすれば、その時々のも出来事発展の様が、さまざま——失われた可能性・実現しなかった可能性も考慮に入れた——可能性の背景の前で歴史的に明瞭に洞察されるものになる、と。(第十段)

「進歩」というのも一種のパースペクティブだとすれば、それを採用しても悪いことはない。これを時間の経過とともに価値が向上するとの見方と解すれば、これはある意味、日常的に根づいている感覚で、たとえば学校教育の基本的考え方でもある。さらに、進歩史観を全体としては否認する人でも、技術や自然科学のもたらす恩恵については、進歩を承認せざるをえないだろう。むしろそれは歴史全体の進歩ではなく、部分的なものではあるが。(第十一段)

むしろ歴史家の「道筋」を見通す能力、「パースペクティブ」の考え方によりふさわしいのは、「進歩」ではなく「発展」という概念・カテゴリーだろう。それは一筋の糸ではなく、もろもろの糸が諸段階を経て進むときの相互関係、その繋がりを見失わずにパースペクティブの中で

〔問1〕⁽¹⁾それが歴史的事実の成立条件だということである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

A 複数の歴史家による共同作業を通じて「事実」が同一過去をもつことで、村や国の私的領域を越えて共通理解されていく、ということ。
I それぞれの人間が想起する過去の一面的な相の中から歴史家が研究をすることで、最も妥当な「事実」を選び出していく、ということ。
U 個人的な感懐を歴史に転化するために記憶違いを修正することで、インパーソナルな次元を超えた「事実」にしていく、ということ。
E 個々の人間の記憶が共通の認識のもとに統合されていくことで、普遍性を獲得し主観を超えた「事実」となっていく、ということ。

〔問2〕⁽²⁾では歴史家は、どんなふうに公的な歴史を描けばよいのだろうか。という問いに対する答えについて、のように説明するものとする。に入る最も適切な語句を本文中から三十七字で抜き出して書け。

という方法で描いていかなければならない。

〔問3〕⁽³⁾ 進歩史観やそれにもとづく「歴史法則」「発展段階説」などは、女性史とも民衆史とも、まったく相容れないのである。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 女性史や民衆史は、進歩史観の方法を当てはめるところから出発し、今日では信用を失ってしまったから。

イ 「女性」や「民衆」についての歴史は、国が経済的に発展していくというような歴史原則に則って語られてこなかった存在だから。

ウ 女性史や民衆史は、国家の指導的立場にある権力者に対抗していった人々について取り上げているから。

エ 「女性」や「民衆」は、歴史学的主流であったアナール派や系（セリ）の歴史学から否定されてきた存在だから。

〔問4〕⁽⁴⁾ こうした歴史の「パースペクティブ的特質」を深く哲学的に考察してきたのが、現代ドイツの哲学者J・リューゼンである。とあるが、筆者が考えるリューゼンが述べた「パースペクティブ的特質」とはどのようなものか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 本来は関連性があるとは言いつれない個々の出来事を、過去から未来まで秩序立てて語ること。

イ 歴史という奇跡的事項の羅列を、その中から共通項を見つけることによって統一すること。

ウ 実現しなかったことも含めさまざまな可能性がありえた歴史を、図らずも一つの方向へ導くこと。

エ 失われた過去の歴史を観察し、誰もが認識できうるものとして記述していくこと。

〔問5〕⁽⁵⁾ 「見同様な現象や事態、たとえば中国で発明された印刷術とドイツで発明された印刷術、別々の民族における狩猟採集から農耕経済への移行、これらはそれだけを取り上げるのではなく、それらと関連するもう一つの事象とともにパースペクティブの中で勘案せねば正しい歴史的な位置づけ・意味づけはできない。とあるが、「パースペクティブの中で勘案せねば正しい歴史的な位置づけ・意味づけはできない。」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 中国で発明された印刷術がドイツに伝わることによって、技術が広まったという国境を越えた歴史観があれば、物事の因果関係を正しく見ることができるから。

イ 印刷術の発明という一つの歴史的現象であっても、中国とドイツにおけるそれぞれの背後に在る要因を考慮しないと、全体の展望をもつことができないから。

ウ 別々の地域における狩猟採集から農耕経済への移行は、一見同一な発展事項に見えるが、相互に関係していない点に注目することが歴史家の正しい態度だから。

エ 狩猟社会から農耕社会への進歩は、同時発生的に世界中で起きた現象だが、それぞれの共通性のみを取り出して調べなければ視野の広さを失ってしまうから。

4 次のA～Cの文章を読んで、あとの設問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 『万葉集』を「読む」ためには、漢字で書かれた原文（漢字本文）を解読して、歌の（ことば）を再現することがまず必要となります。

その解説は『万葉集』の時代から遠ざかるにしたがって難しくなります。（ことば）と（文字）のずれを埋めていた、万葉歌人たちに共通する知識や（ことば）についての感覚がわからなくなるからです。

（小川靖彦「万葉集と日本人」による）

B

『万葉集』を「読む」ためには、「訓む」こと、つまり漢字本文を解読して日本語として読み下すことが必要です。そして、「訓む」ことは機械的に漢字本文を（ことば）に起こしてゆく作業ではなく、「解釈」を伴う創造的な行為なのです。『万葉集』の場合は、「読む」ことは「訓む」ことと一体であるのです。そのため、『万葉集』の「やまと歌」は時代とともに「解釈」が変化するだけではなく、本文（読み下し）そのものさえも大きく変化してきました。

（小川靖彦「万葉集と日本人」による）

C

『新古今和歌集』以後の中世の歌集・歌論書・歌学書のほとんどが、『新古今和歌集』の本文（読み下し）を踏襲しました。現代の読み下し方は、鎌倉時代の仙覚に始まりますが、江戸時代まで異端の説でした。『新古今和歌集』の本文が歌人や歌学者の心を引きつける魅力的なものであったことに加え、『新古今和歌集』が大きな権威を持っていたからです。

『新古今和歌集』の撰者たちは、このように、時間性を強く持つとともに、その時間を、鮮やかな空間表現が生きて感じさせるような読み下しを意識的に選びました。目に見えるような鮮明な空間表現によって推移する時間に形を与え、深い情趣を感じさせるというのは『新古今和歌集』の詠法にほかなりません。この詠法の（始まり）を示すような『万葉集』の歌と読み下しを意識的に選び取ったのです。それは平安時代後期に多様となった『万葉集』を一つの姿に「整定」することでもありました。

『新古今和歌集』の撰者に任命された時、俊成の嫡男の定家は四十歳でした。これ以前の二十代の頃から定家は『万葉集』の歌を「本歌取り」した和歌を詠んでいます。生涯を通じて、定家は『万葉集』のさまざまな歌を本歌取りしました。本歌取りは、古歌の歌句を利用するだけでなく、これを通じて古歌の世界を取り込み和歌の表現を重層的なものとする技法です。定家はこれを得意としました。

本歌取りするためには、古歌についての十分な知識が必要です。『万葉集』について、定家が長歌までも一首全体を深く読み込んだ上で本歌取りしていることが、五月女肇志氏によって明らかにされています⁽²⁾（藤原定家論）。

『万葉集』の歌を本歌取りした歌から、定家の〈古代〉像を窺うことができます。定家はそれらの歌の中で、しばしば本歌の世界をはるか遠いものとして詠んでいます。その典型が建仁元年（一一〇一）に後鳥羽院が主催した「老若五十首歌合」のために作った次の歌です。

（3）たをやめの 袖かもみちか 明日香風 いたづらに吹く 霧の遠方

（訳）たおやめ〈少女〉の袖であろうか、それとも紅葉であろうか。霧の立ち込めている遠くの方で明日香風が空しく吹いて

であったのです。『万葉集』の歌を本歌取りした定家の歌に、「昔」「ひさしき世」ということが散見することにも、それが表れています。

定家は『新古今和歌集』を編纂している時期に『伊勢物語』を書写しています。その後、少し間をおいて、四十代末に五代集（『万葉集』『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』）の秀句を抜き書きした『五代簡要』（万物部類俊歌抄）とも言います）を編み、五十代には『万葉集』を書写し（広瀬本の祖本。「広瀬本万葉集解説」参照）、そして、六十代から『古今和歌集』『後撰和歌集』や、『伊勢物語』『源氏物語』などを熱心に書写しました。『古今和歌集』については、記録に残るだけでも十四回も書写しています（西下経一氏『古今集の伝本の研究』）。当初は俊成の写本に従いましたが、書写を繰り返す中で、これを自分の見識に基づく新しい姿に変えてゆきました。

定家はもともになる本を単純にコピーしたのではなく、常にその時の自分の最新の見解を加えて、これらの「古典」の本文を定めていったのです。

今日、私たちは定家の手を経た本で、『古今和歌集』『後撰和歌集』『伊勢物語』『源氏物語』などの「古典」を読んでいます。つまり私たちは定家の目を通して「古典」を見ているのです。これほどまでに広い範囲で「古典」を書写し、後世に強い影響を残した定家は、日本最初の「古典学者」と言うことができます。

定家は、宮廷や貴族が武士に政治的実権を奪われてゆく中で、「古典」を精神の拠り所としたのであり、「古典」を完備することによって文化の源泉であろうとしたのです。

『万葉集』も「古典」の一角でした。現存する定家の手を経た系統の写本（伝冷泉為頼筆本、広瀬本など）によれば、定家の『万葉集』は、題詞を低い位置に書き、巻二十の末尾九四首の欠けた（他本によってこれ

いる。）※「たをやめ」を「少女」とするのは、藤原為家（定家の嫡男）が『万葉集』の歌句に略注を加えた『万葉集佳詞』による。

この歌は志貴皇子の歌を本歌取りしています（調は広瀬本による）。たをやめの 袖吹き返す 明日香風 都を遠み いたづらに吹く（『万葉集』巻一・五）

（訳）たおやめ〈少女〉の袖を吹き返す明日香風は、今は都が遠くなったので空しく吹いている（たおやかな女性の袖を吹き返すことはやない）。※現代の訓では初句「采女」の志貴皇子の歌は、明日香の都の若い宮女たちが袖を風に翻している華やかな姿を描きながら、それをフエイドアウトして、遷都後の空しく風が吹くばかりの寂しい情景を詠んでいます。

定家の歌は、まず風に翻っているのが宮女たちの袖か紅葉かわからなと言います。これは楠本人麿の「石見相聞歌」の第二長歌の（調は広瀬本による）、

……大船の 渡の山の もみち葉の 散りし乱れに 妹が袖さやにも見えす……

（『万葉集』巻二・一三五）（訳）……（大船の）渡の山（石見国（今の島根県西部）の歌枕）の紅葉が散った乱れに、妻の振る袖がはつきりとは見えす……

と、自分を慕って妻が袖を振っているのが、紅葉が散るのにまぎれて見えないことを言った歌句を踏まえているのかもしれませんが。そして、さらに見ようと目を凝らしてみても、霧の彼方に明日香風が吹くばかりです。

定家の歌は、志貴皇子が想起した明日香の都の宮女たちの情景を、袖と紅葉の紛い、霧というフィルターによってさらに捉え難いものとしています。定家にとって、〈古代〉の情景ははるか遠くにあつて惚ぼもの

を補う）、白河院政のもとで標準的なものとなっていたスタイルを踏襲しました。しかし、漢字本文を『万葉集』の本体と見た藤原清輔の考え方も取り入れ、読み下し文を原則として片仮名で記すという新しい試みもしました。

定家が俊成の本や金沢本を尊重していたことは明らかになっています（広瀬本は金沢本の漢字本文の初歩的な誤写をそのまま受け継いでいます。小川「書物」としての万葉集古写本）、何回『万葉集』を書写し、どの程度漢字本文に手を加え、読み下し方を改めたかについては、まだ研究が始まったばかりの段階です。

定家自筆の『万葉集』の写本（卷子本）は、定家から鎌倉將軍の源実朝に贈られ（吾妻鏡）、後代には、江戸幕府の第二代將軍の徳川秀忠から後水尾天皇に献上されるなど（徳川実紀）、大きな権威を持ちました。

（5）『万葉集』の成立事情については、定家は俊成よりもさらに急進的な考え方をしました。貞永元年（一二三二）、七十一歳の折に書かれた論文『万葉集長歌短歌説』では、原典（『万葉集』）に当たるべきであると主張し、人麿と赤人を同時代の歌人とするなど事実関係に誤りのある『古今和歌集』の仮名序は、『万葉集』を開いて見た人のこととは思えない」とまで言い切りました。

さらに、定家には現在では逸文しか伝わっていない「京極中納言入道抄」という著作があります（有職故実書「拾芥抄」に引かれています）。『万葉集』の年代を知るためには、『万葉集』そのものに当たるべきであるという主張が、『万葉集長歌短歌説』と同じ文言で書かれています。その後に、それにはない文章が続いています。その文章は、孝謙天皇の御世に、左大臣橘諸兄はじめ高位の人々が集まって『万葉集』を編纂したとする「栄花物語」の説を、『万葉集』には諸兄没後の歌も収められていると批判して、家持が『万葉集』を記したのでは

ないかと推測するものです。

本来「勅撰」の書物というものは、天皇が高位の人々に勅命を下して編纂させるものです（増田繁夫氏「勅撰和歌集とは何か」）。この常識を当てはめて、聖武天皇勅撰説に立つ人々は、橘諸兄に編纂の勅命が下されたと考えていました。この考えに疑いを示したということは、定家が、『万葉集』が勅撰和歌集であることも疑っていた可能性があまりあります。⁽⁶⁾

平安時代末期から鎌倉時代初期の動乱の時代の中で、定家は『万葉集』そのものを見つめて判断するという道を選んだのです。

（小川靖彦「万葉集と日本人」による）

〔注〕

嫡男——長男。

志貴皇子——日本の飛鳥時代から奈良時代の皇族。

広瀬本——『万葉集』の写本の一つ。

フエイドアウト——映像が徐々に消えていくこと。

柿本人麿——飛鳥時代の歌人。

歌枕——和歌によく詠まれる名所。

藤原清輔——平安時代の歌人。

赤人——山部赤人。奈良時代の歌人。

逸文——一部分だけが残る文章。

左大臣橘諸兄——奈良時代の歌人。

家持——奈良時代の歌人。

〔問2〕⁽²⁾『万葉集』の歌を本歌取りした歌から、定家の〈古代〉像を窺うことができます。とあるが、定家の〈古代〉像とはどのような像か。次のうちから最も適切なものを選んで。

ア「たをやめの袖」で若い宮女を詠んだように、京から遠く離れていた「古代」の明日香を現在の歌に詠むことで古代の目で今を捉えようとする像。

イ「紅葉」がはかなく散る様子を表現することで、『万葉集』こそが最も「古代」的な日本人の心情をあらわした文化のルーツであると捉える像。

ウ「明日香風」で寂しさを表現することで、かつての和歌の技法に表現の理想を見出し本歌取りによって「古代」を回顧的に見ようとする像。

エ「露」でよく見えないという表現にあるように、当時とは時代性が異なる「古代」を遠い存在ではあるけれどひとつの憧憬の対象として見る像。

〔問3〕⁽³⁾たをやめの袖 袖かもみちか 明日香風 いたづらに吹く 露の遠方をすべて現代仮名遣いに直して三十一文字で書け。ただし、各句ごとの空白は字数に含まない。

〔問1〕⁽¹⁾それは平安時代後期に多様となった『万葉集』を一つの姿に「整定」することでもありました。とあるが、どういうことか。次のうちから最も適切なものを選んで。

ア Aに「漢字で書かれた原文（漢字本文）」を解読して、歌の（ことば）を再現することがまず必要となります」とあるように、藤原定家が『万葉集』の漢字で書かれた和歌を『新古今和歌集』に本歌取りすること、その和歌集に權威を与えた、ということ。

イ Aに「万葉歌人たちに共通する知識や〈ことば〉」についての感覚がわからなくなる」とあることから、古代的な歌の形体をもつ『万葉集』の技法を『新古今和歌集』の中に取り入れることによって、和歌の新しいスタイルを提示した、ということ。

ウ Bに「漢字本文を解読して日本語として読み下すことが必要です」とあることから、読み下しに様々な知識を必要とする『万葉集』をわかりやすい仮名書きにしたことで、歌人たちの心を引きつけ「新古今和歌集」が当時の主流となった、ということ。

エ Bに「やまと歌」は時代とともに「解釈」が変化する」とあるように、『万葉集』に様々な解釈が生じていたため、藤原定家が『新古今和歌集』における本歌取りでの詠み方を決定することで『万葉集』の在るべきかたちを示した、ということ。

〔問4〕⁽⁴⁾つまり私たちは定家の目を通して「古典」を見ているのです。とあるが、なぜそのように言えるか。次のうちから最も適切なものを選んで。

ア 現在伝わる「古典」の多くは、書写を繰り返す際にそのまま書き写したのではなく、定家自らの判断を加えた「古典」が流布したものであるから。

イ 現在伝わる「古典」の多くは、『万葉集』をはじめとする様々な「古典」を定家が大量に書写することで、広く人々に読まれるようになったから。

ウ 現在伝わる「古典」の多くは、定家が「古典」の書写を繰り返す中で、漢字本文の誤写をしないようにできるだけ正確な複写を心がけたものだから。

エ 現在伝わる「古典」の多くは、最古の古典学者である定家が書写した「古典」そのものが、將軍や天皇に献上されるなどして權威を持つことになったから。

〔問5〕⁽⁵⁾『万葉集』の成立事情については、定家は俊成よりもさらに急進的な考え方をしました。とあるが、定家がどのように考えたのかを のように説明するとき、 に入る最も適切な語句を本文中から三十七字で抜き出して書け。

定家は 考え方から、編纂の時代について再評価することで、家持が編纂者ではないかと推測するようになった。

〔問6〕⁶⁾ 平安時代末期から鎌倉時代初期の動乱の時代の中で、定家は

『万葉集』そのものを見つめて判断するという道を選んだのです。とあるが、この定家の姿勢を筆者はどのように考えているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 戦争や天災の絶えない荒廃した時代において、『万葉集』は日本最古の勅撰和歌集であるという正当性を、後世の人々に向けて主張したい、と考えている。

イ 時代が移り変わりゆく中で、『万葉集』の本来の姿を見つめ直すことによって成立に関する考えを展開し、文化を支えようとしていた、と考えている。

ウ 時代を経るに従って、『万葉集』が徐々に改変され本来とは異なるかたちになってしまったことを嘆き、原典に当たって和歌そのものを味わうべきだ、と考えている。

エ 時代の激動期に没落していくかつての歌道の名門貴族として、『万葉集』を和歌の標準的なスタイルとして残したい、という強い意志があった、と考えている。